

障がい者アスリートへのボランティア活動をとおした学び

The Analysis of Students' Learning through Volunteer Activities for Athletes
with Disabilities

曾我部 敦介・近藤 益代

1. はじめに

全国障害者スポーツ大会は、「障がいのある選手が競技等を通じスポーツの楽しさを体験するとともに、国民の障がいに対する理解を深め、障がい者の社会参加の推進に寄与すること」を目的とする、日本国内最大の障がい者スポーツの祭典である（愛顔つなぐえひめ国体・えひめ大会実行委員会 2016：1）。

2017年10月28日（土）から30日（月）にかけて、第17回全国障害者スポーツ大会「愛顔つなぐえひめ大会」（以下、えひめ大会）が開催された。えひめ大会では、選手約3,500名、監督・コーチ等の役員約2,000名、計約5,500名が参加した（前掲2016：5）。

大会は、情報支援ボランティア（手話、要約筆記）、運営ボランティア、選手団サポートボランティア（以下、SV）、実施本部員（選手団班・県職員）、実施本部員（大会運営）、医療・救護班、大会協力班、競技補助員などの様々なボランティアのサポートを受けて運営される。中でもSVは、「大会に参加する選手が快適な環境のもとで競技を行うことができるよう、案内、介助、誘導などのサポートを行い、大会運営の円滑化を図るとともに、選手との交流を通じて、障がいへの理解を深める」（前掲2016：12）という役割がある。えひめ大会ではSV養成協力校として愛媛県内の大学や専修学校等の20校が認定され、2017年10月26日（木）から31日（火）の6日間（大会日程前後の出迎え、公式練習サポート、見送りを含む）にわたって携わった。

聖カタリナ大学では、社会福祉・健康スポーツ・人間社会・保育の学科を擁しており、教員免許、保育士、社会福祉士、障がい者スポーツ指導員などの資格を取得することができる。SVとして大会に参加することは、学生が障がい者やスポーツに関わる経験値を上げる機会となる。そこ

で、本学ではSV養成講座を開講し、えひめ大会で活躍できる学生を養成した。

2. 目的と方法

平成29年10月、えひめ大会に「障害者支援実習」（以下、実習）の科目履修生として参加したSV（男子40人、女子40人）を対象に、「障がい者の方を支援することとは」というテーマで実習レポートを作成・提出させた。本稿では、今後の障がい者スポーツ実習における学生指導の基礎資料とすることを目的に、学生の実習での活動の内容や状況を確認し、そこから得た学びの分析・考察を行う。

本稿で使用した計量テキスト分析ソフトウェアは、樋口耕一氏が開発したKHCoderであり、①頻出語（頻繁に使用された語）、②KWICコンコーダンス（指定した語句の本文提示）の機能を使用した。なお、事前に学生に実習レポートを研究に用いることについて説明を行い、同意を得たうえで分析を行った。

3. えひめ大会について

「愛顔つなぐえひめ大会」という大会愛称には、前向きな気持ちと思いやりの心が結集した愛のある愛顔でおもてなしを行い、選手・役員や観客・運営を支えるスタッフなど「みんなが愛顔（笑顔）でつながる大会にする！」という気持ちが込められている。

大会の基本方針は、障がいのある人もない人も、スポーツを通じて、障がいに対する理解を深めるとともに、新たな可能性へのチャレンジと、共に支え合う心の交流から生まれる愛顔を日本中につなげて行く大会を目指して、①誰もが絆を実感できる大会を創ろう！、②みんなの愛顔があふれる大会を楽しもう！、③未来へはばたく新しい自分を見つけよう！の3つが定められた（前掲2016：3）。

えひめ大会の競技としては、6つの個人競技（陸上競技・水泳・アーチェリー・卓球・フライングディスク・ボウリング）と、7つの団体競技（車いすバスケットボール・バスケットボール・ソフトボール・グランドソフトボール・バレーボール・サッカー・フットベースボール）、3つのオープン競技（肢体障害者ボウリング・ブラインドテニス・精神障害者フットサル）が行われた。本学SVは、サッカー（北条スポーツセンター）とボウリング（キスケボウル）の担当となった。社会福祉学科30名、健康スポーツ学科26名、人間社会学科8名、保育学科16名の合計80名の

学生が参加することとなり，サッカー担当は全 43 名の 7 グループ，ボウリング担当は全 37 名で 27 グループの編成となった。

4. SV の活動内容

SV 活動の内容は，大会に参加する 67 選手団（47 都道府県と 20 政令指定都市）の中で担当になった選手団と行動を共にし，選手団班実施本部員（以下，本部員）と共に，①空港・駅・選手団宿舎等で選手団の来県・離県時の歓送迎，②選手の荷物管理，弁当・毛布の配布，③選手団控所や各競技会場集合への案内・誘導，移動のサポート，情報伝達，④ふれあい広場への案内・誘導，⑤選手の応援，選手との交流活動等である。

ボウリングは，全国から 67 選手団が参加となった。本学 SV は，各選手団に 2，3 名がついて活動を行った。各グループには本部員が 1 名ついて，SV に具体的な指示を出していた。サッカーは，全国より 7 選手団の参加であった。本学 SV は，各選手団に 7 名程度ついて活動を行った。各グループには本部員が 1 名ついて，SV に具体的な指示を出していた。

本部員が SV に的確に指示を出し，SV と知的障がい者とがコミュニケーションをとって，協力関係が築かれているチームには活力があった。また，SV は手作りグッズで担当都道府県・政令指定都市の応援を行い，大会を盛り上げていた。

5. 結果と考察

(1) 語の抽出と頻出語

実習レポートからの記述データ 80 件のうち，抽出語句（分析対象ファイルに含まれる全ての語の延べ数）は 29,821 語（使用 10,906 語），異なり語句（何種類の語が含まれていたかを示す語）は 2,076 語（使用 1,705 語）であった。抽出語の多い順としては，障害（障がい）267 回，障害者 231 回，支援 220 回，選手 166 回，自分 142 回，サポート 127 回の順であった。頻出語について上位の語句を表 1 に示した。

表1 実習レポートにおける頻出語

頻出語	出現回数	頻出語	出現回数	頻出語	出現回数
障害(障がい)	267	必要	30	スポーツ	16
障害者	231	行動	29	荷物	16
支援	220	一緒	27	お互い	15
選手	166	対応	27	精神	15
自分	142	国体	26	知識	15
サポート	127	健常	23	緊張	14
ボランティア	101	笑顔	23	重要	14
知的	67	大事	21	偏見	14
相手	64	普通	21	コーチ	14
大切	62	言葉	20	チーム	14
コミュニケーション	58	身体	20	考え	14
理解	52	機会	19	応援	13
参加	49	試合	19	体験	13
経験	44	自身	19	不安	12
サッカー	41	イメージ	18	プレー	10
気持ち	35	関係	18	説明	10
生活	34	交流	17	感謝	10
会話	31	信頼	16	差別	8

(2) 実習レポート記述内容について

実習レポートにおける記述内容について、肯定的な意見が多くあったため、表1の頻出語および拙著^{注1)2)3)}を参考にして、学生にとって印象的だった体験や得た学びを以下にまとめる。分析対象となる記述を、①コミュニケーション・会話、②信頼、③必要・重要、④不安、⑤感謝、⑥経験、⑦イメージ、⑧偏見・差別、⑨大切・大事、⑩サポート・支援とした。

1) 役割遂行するために求められる力

ここでは、「コミュニケーション・会話（コミュニケーションは58回、会話は31回の使用）」、「信頼（16回使用）」、「必要・重要（必要は30回、重要は14回の使用）」、「不安（12回使用）」を扱う。

表2 コミュニケーション・会話についての記述

障がいがあるといっても、コミュニケーションがとりにくいといったことが全くなかった。
コミュニケーションが苦手な人でもこちら側から話しかけると、笑顔で応えてくれる。
私は、短い日々だったので、多くコミュニケーションを取ることを頑張りました。
コミュニケーションをとることが難しいと思ったため選手に初めて会う日はとても緊張した。
特に知的障害ということで発達障害やダウン症の方など、コミュニケーションをどう取ったらよいか、わからなかった。
障害者の方を支援するというはその障害者の方達とちゃんとコミュニケーションを取りよりよい関係を築いていくこと。
最後の方は積極的にコミュニケーションを取りにいけて上手く相手が考えていることを感じて動くことができた。
信頼を築くには相手とのコミュニケーションを取ることの大切さを学んでいこうと思います。
初日はどう選手に話しかけたら良いかわからず、コミュニケーションをとることができなかった。
障害者の方を支援するというは、第1にコミュニケーションをとることが大切だと私は思う。
選手と交流し、コミュニケーションをとることで、心のサポートもすることが大切なことだと私は思う。
いろんな話を無理せず、打ち明けてくれました。すごく親密な感じで会話ができ、1日、1日すごく楽しかったです。
会話そして互いに笑い合うことも一つの支援になるということがわかった。
相手のペースに合わせて、会話をしたり、行動しなければならなくなるのでとても大変だと思う。
相手の年齢に配慮する。たくさん会話をする。対応は積極的にする。がポイントと学んだ。
その時、「はっ」と気が付いた。この子なりの会話の仕方、相手と関わることにに対してこの子なりにがんばっている。
会話も友達と話したりしている普通の会話でいいんだということがわかった。
私たちが話しかけても一言、二言で話が終わってしまうことがあり、なかなか会話が続きませんでした。
日が経つにつれ、任される仕事も増え、選手団とも会話する回数が増えた。
自分は障害者の方と何を話したらいいのか、どうやって会話を成り立たせればいいのか全く分からなかった。
「はい、ありがとうございます」と返していただき、これをキッカケに、少しずつ会話が増えていった。
そのままを肯定的に捉え、相手が何を望んでいるのかを考えて、会話して、動くことだと思います。

「コミュニケーション・会話についての記述」(表2)が示すように、大多数のSVは、選手と積極的に言語・非言語のコミュニケーションを図り、高いレベルで参加者に接することができた。その一方で、「コミュニケーションをどう取ったらよいかわからなかった」「できなかった」「会話が続きませんでした」という体験をした学生もいる。

表3 信頼についての記述

少しでも信頼関係をきづくことで安心して話したり、笑顔で挨拶しあったりできると思う。
障害者の方とコミュニケーションの幅が広がり、そこから、お互いの信頼関係を築き上げていくための大きなきっかけになっていく。
障害者手帳を見してくれるぐらい、信頼を受けたと感じました。その他にはボウリングについて長く語られていました。
自分にすることはあまり無いように感じた。しかし、それは自分の信頼が低かったためであったと考える。
任された仕事は確実に、加えて信頼を高めていくことが大切なことだと考えた。
信頼を高めていくことが大切なことだと考えた。その信頼度を高める方法が、臨機応変に対応していくことだと思う。
自主的に行うといった行動が他の人からの信頼を得られる。
健常者どちらにしても、信頼を得る行動を取り、一人一人に対して信頼感のある人物になることが大切である。
支援をするうえで、どのくらいの期間でもまず心を開く、信頼を築くことがでなければ、支援やサポートすることはできない。
この経験を今後の学生生活に活かしていき、信頼を築くには相手とのコミュニケーションを取ることの大切さを学んだ。
色々な話をきいてあげたりすること、それにより信頼関係が生まれ、よりよい活動が障害者の方でもできるようになる。
ハイタッチを通して終わる頃には普通に会話をするようになっており、ある程度の信頼関係は築けていたのではないかと感じる。

表4 必要・重要についての記述

少しわかりづらいものにはこちらであらかじめ説明しておく必要があると思った。
あらかじめ「今この時間だから何時に集合」というのを伝えておく必要があると思った。
試合前まで緊張をほぐしてもらうこと、どういったことが必要かを話から聞くことに専念した。
一番近くで4日も支援をすれば、それがどれだけ必要で、支えになるか身をもって体験することができて本当に良かった。
臨機応変に対応することが必要であると考えた。
言葉をかけ合い、意思疎通することで初めて伝わることもあり、相手は何を必要としているのか気が付けるようにしなくてはいけない。
状況によって障害者の方の心情を察して距離感をはかるのも支援には必要だと思いました。
支援するにあたって重要なことは「その人の障害を理解する」事です。
これしたら迷惑かなとか考えずにとにかく話しかけることが重要だと分かりました。
個性があることを認識したうえで障害者の方を支援することが重要なんだと思った。
相手の持つ悩みを理解するのも重要だと感じた。
信頼関係は利用者のニーズを引き出す際に重要なものなので、知的障害の方と出会えたことは良い経験になった
会話の中にも選手に関する情報が得ることが出来、本人以外からの情報の重要性がわかった。

「信頼についての記述」(表3)では、役割が少なかったSVは「自分の信頼が低かったため」と自己分析している。「必要・重要の記述」(表4)が示すように、支援するためには情報交換が欠かせない。言語・非言語のコミュニケーションをとおして選手と信頼関係を築くことができた学生が、SVとして機能することができたと推察する。すなわち、言語・非言語のコミュニケーションが図れなければ、SVとしての役割を遂行することが困難となる。

表5 不安についての記述

最初は どういうふうに対応したらいいのかなとか不安がたくさんありました。だけど支援していくうちに慣れてきて楽しかった。
私は今回知的障害者のサッカーをサポートすることになり、最初は不安でいっぱいだった。
いざ選手の人たちと対面すると、向こうから話しかけてくれて、不安がなくなった。
最初は、あまり障害に対する知識も浅く、本当にしっかりサポートできるのだろうか、と不安がいっぱいで心配していた。
心配していたのですが、選手の方たちと関わっていく中でその不安は消えていました。
イメージや不安に思う人もいるのが本当の所です。今回えひめ大会イメージや不安に思う人もいるが本当のところは、
最初はとても不安だった。どのように支援していくか、関わっていくか。
どのように話していくかなどいろいろたくさんの不安があった。でも、そんなにも難しいことではなかった。
選手に初めて会う日はとても緊張していて不安なところもあった。しかし、選手の方からフレンドリーに話しかけてくれた。

対人関係の「不安」(表5)を取り除くこともコミュニケーション力である。SVは、これまであまり接することがなかった知的障がい者に対して、どのように接すればいいのか、ある程度知識はあってもそれを実際に現場で実行できるか不安を抱いていた。試行錯誤を重ねることで、学生なりの導入方法を見つけ、また緊張や恥ずかしさにも慣れ、より積極的な活動ができると考えられる。

2) SVの成長

ここでは、「サポート・支援」(サポートは127回、支援は220回の使用)「経験(44回の使用)」

「イメージ（18回の使用）」、「大事・大切（大事は62回、大切は21回の使用）」、「偏見・差別」（偏見は14回、差別は8回の使用）の語句を扱う。

表6 感謝についての記述

こちら側から話しかけると、笑顔で応えてくれる。感謝の気持ちを忘れておらず、礼儀正しく、私たちも見習わなければならない。
今回サポートボランティアをやって本当によかったと思います。感謝されるということのうれしさや、言葉で表さなくても伝わってきた。
普通の生活を送れるような体を産んでくれた親に感謝すべきだと考える。
今回、ボランティアに参加させていただけたことに感謝している。今回のことをこれからの生活に活かしたいと考える。
お別れのセレモニーでは、感謝の言葉とメッセージを書き合ったり一緒に最後の時間を共にした。
お互いが得るものが違っても、最後は「ありがとう」の感謝の気持ちや充実感は得ることができた。
えひめ大会に参加させて頂き、とても感謝しております。このような経験は2度とないことだと思いました。
最後の別れの時、感謝の言葉を言われた時は、ボランティアに参加して良かったなと思えた。
最後のお別れも感謝していただいたがこちらのほうが感謝の気持ちでいっぱいであった。

「感謝についての記述」（表6）が示すように、やりがい・達成感を感じる学生が多かった。自分が積極的に活動することにより、「ありがとう」という言葉や笑顔を見ることで、充実感を得ている。

表7 経験についての記述

お互いが気持ちのよいサポートをすることが大切だと学ぶことができ、この経験をこれから先にもいかせるようしていきたいです。
今回のえひめ大会に参加し、とても良い経験、思い出となりました。「ボランティア」とは良いことだと改めて感じました。
大切さ、しんどさたくさん思いがあったけど、とてもいい機会だったたしいい経験になりました。
選手たちと別れる際は、とてもさみしかったです。めったにない経験をさせてもらってとてもいい経験になりました。
この4年間でこれ以上のものはないと言っても言いほど経験ができてよかったです。
この経験を今後、活かして、全ての人達が楽しい思いができるようにしたいです。
今回の体験、経験を忘れず、心をこめて接することを心がけたいです。
こうした出会いや、サポート、協力することによって、新たな輪が広がり、こうした経験が自分の自信につながっていく。
社会へ出ても、この経験が自分の人生の糧として、役立てていけたらと思います。
この経験があるから、この先色々な方と出会っても受け止めることができると思いました
知的障害の方と出会えたことは、良い経験になった。

「経験についての記述」（表7）では、実習を振り返り、実習を頑張った良かったという意見が多く示されている。「この経験を活かしたい」、「自信につながった」、「良い思い出になった」という肯定的な意見が示されている。支援する良さを感じ、人との交流や現場での笑顔を思い出すと、また参加してみたいという気持ちになるのであろう。

表 8 イメージについての記述

はじめは、「障害者って怖いイメージがある。上手くサポートや交流できない。」とマイナスのことばかり考えていた。初めて選手団の人達と話した時は、少し怖いイメージがありこの人達とちゃんと交流できた上でサポートできるのかが分からなかった。普通の方となんのかわりもなく、正直、思っていた障害に対するイメージががらりと変わりました。支え合いながら今までやってきたのかも考えた。障害者といえば引っこみ思案なイメージが私にはある。何ら変らない、同じ人という考えでいると思いますが、一部の人は怖いイメージや不安に思う人もいるのが本当の所です。障害者の方へのイメージや障害者スポーツに対する理解が、少しでも多くの人に届いたと思います。選手の方が感じる障害者に対する優しさや冷たさを聞き、私もそういったイメージを持っていたのかもしれないと思いました。障害者の人と交流することによって、自分が想像していた障害者のイメージとまったく違うと感じた。自分が想像していた障害者のイメージとまったく違うと感じた。知的障害者、自分のことを表現することが難しく、コミュニケーションも取りづらい、というイメージだった。私は初めて障がい者の方のボランティアをした。私の中のイメージでは、手が負えない、などマイナスなイメージしかなかった。

表 9 偏見・差別についての記述

選手たちの姿に関心していた。障害者だからという偏見は、本人にとって、とても辛く悲しいものである。はじめから偏見を持つのではなく、実際に交流してみることで気付かされることもある。たたえてあげたり、ほめてあげるということが障害者に対する差別や偏見がなくなるだろうなと思いました。この大会期間中一回も障害のある人に偏見の目で見ることはなかったです。障害者だから、健常者だから偏見や差別的なものは、自分自身がボランティアを通してあまり感じなかった。自分自身、最初は偏見やどのようにコミュニケーションをとればよいか全く分からなかった。そう思ったことで、どれだけ私が障害者というだけで偏見をしていたのか気づかされました。少しでも障害者に対する誤った偏見が愛媛県ではなくせるのではないだろうかと思いました。感じたことは相手のことを敬い偏見をもたずに接していことがとても大切だと感じました。いい経験になったと同時に、障害に対するイメージや知識のない人の偏見を無くしたいと思いました。国体を通して、障がいをもっているからだといって同情をしたり、偏見をもったりしてはいけないと思いました。障がいも自分の個性だと思えたら、偏見をもつ人も減るのではないかと思います。そういった偏見をなくしていくことが障害者の方に対する支援にも関わってくる。障害者というだけで、偏見や差別をしてしまう人がいると思います。「健常者だから」とか「障がいがあるから」といった差別的な見方や接し方は誰ひとりとしていなかった。障害者を見ためて差別してはいけないなと本当に痛感しました。たたえてあげたり、ほめてあげるということが障害者に対する差別や偏見がなくなるだろうなと思いました。健常者も障害者も何の差別もなく、お互いが「住みよい町づくり」を築き上げていく大切さを感じた。

表 10 大切・大事についての記述

人それぞれでその方のことをよく理解することが、大切だと思います。支援したらいいかは人それぞれでその状況に合わせて対応していくことが大切だと思った。こうサポートしてほしいといったことも話してくれたので会話することの大切さを改めて感じました。障害をもった方を支援するということは、支援しながら相手の優しさに甘えることが大切だと思います。皆の協力により、選手が自己ベストを出せるようにして行く事も大切だと感じました。今回国体ボランティアに参加したことで心理的な支援の大切さを知ることができました。もちろん、物的な支援も必要だとは思いますが、人的な支援も大切だと感じました。人見知りな自分をまた1つ成長し、人と関わる大切さを感じる事が出来ました。この人は特別だというような考えは持たず普通に接していくことが大切だということです。「短所」の部分に目が行きがちですが、大事なはその陰に隠れた「長所」の部分に目を向ける事が大事。支援するには生活機能を能力と実行機能という面から見極めることが大事です。どちらにも言えることは、一人ひとりを「個人」として尊重するというのが一番大事になってくる。障害者の方というよりも人を思いやるという気持ちで接することが大事。障がい者を特別扱いするのではなく、ごく普通に接することが大事だと気づいた。毎回笑顔で、返事してあげることが大事だと思った。

表 11 サポート・支援についての記述

精一杯ボールを追いかける姿を見て、サポートする私達が沢山の元気と勇気をもらえることができました。
何か困っている様子だったら、こっちから優しく声を掛けて、サポートをするという考えが必要だと学びました。
優しく声を掛けて、サポートをするという考えが必要だと学びました。サポートする側もされる側にもそれぞれの考えがある。
今まで自分自身が思っていた支援、サポートという内容を考え、改め直すべきものだと気づかされた。
サポート相手のことをしっかり理解することが知らないと気がつきませんでした。
サポートを必要とする人がいるのを見つけると手を差しよべるのが重要です。
障害者のペースに合わせた動きや自分から進んでサポートしていくことで、互いに嬉しい気持ち、笑顔があふれる時間を作り上げられた。
今回サポートするというこの経験は、自分の将来の夢の選択技が増えた。
障がい者の方をサポートするということは、一見簡単そうに見えていたけど実はとてもしんどい。
とてもよこんでもらえて今までサポートボランティアしてきたやりがいや達成感を感じることができた。
情報共有を行うことで多職種とまではいかないが連携して選手たちをサポートできたのではないかと感じる。
障がいのある方々へのサポートの仕方を学ぶことができたので、とても貴重な支援実習となりました。
将来は障害を持っている人達を支援するような施設に入りたいと思っています。
福祉には色々な人がおり、障害者の方の支援を一度でいいからしてみたいという思いがありました。
相手の話をゆっくりきいたりすることが障害者の方を支援することが一番よいと思った。
これからは、この機会のことを忘れず、聞いたこと、見たこと、支援したいことを就職した時、身近で起きた時に活かしたい。
私は、「相手のことを理解すること」だと思います。支援すると言っても、何をするって問題になると思います。
知的障害のサポートボランティアとして選手たちへの支援をしたことを胸にこれからの支援に役立っていきたい。
私は障害者の方を支援するというには心から向き合わなければならないと思う。
「どうしました？何かお手伝いできることはありますか？」それだけで支援できることがあると思います。
障害者さんを支援したい気持ちと何をどうすればいいのかがよくわからず戸惑ってしまった
支援していくうちに逆に向こうの力をもらったりして自分自身も支援されたり、選手同士の支えあつたりというもので成り立っている。
障害の方も全ての方々がより良く生きるための支援を、これからも考えて取り組んでいきたいです。
この4日間を通して、障害者の支援をすることは肉体的にも精神的にもかなりしんどいことであり大変なことであった。
障がいのある方に、心がとても純粋で支援をしている中で、考え方が変化した。

実習前は障がい者や実習にあまり良い「イメージ」(表 8) がなかったが、多くの学生はそのイメージを払拭し、「実習をして良かった」という印象に変わっている。さらに、「偏見をなくしたい」や「住みよい町づくり」へと関心を広げていた(表 9)。そして、「大切・大事」(表 10)や「サポート・支援」(表 11) が示すように、最終的に学生は、障がいや障がい者について理解することの大切さ、選手とコミュニケーションを取る際、相手の気持ちを大事にするということを学んだと理解される。

6. まとめ

SV も選手に会うまでは、緊張していたり、不安になったり、どちらかといえば偏見や差別の意識もある学生もあったようであるが、実際に実習に参加して障がい者とコミュニケーションをとることにより、その意識が変わってきたり、間違っているということを感じる学生も多かった。選手と交流することで信頼関係をつくることができ、障がいがあってもなくても、お互いが一人の人間として尊重し合う関係が重要であることを感じている。

この経験がとても自分の為になった学生も多く、今後の生活にも活かしたいという学生もいた。障がいについて、学内で知識を学ぶことはできるが、実際に障がい者とふれ合うことで解ること

が多くある実習であったといえる。また、サポート・支援の仕方も実際に授業では学習しているが、現場で実践することは難しかったようである。

このように、実習において学生は様々な気づきがあった。この気づきを大切にして、これからの生活や授業に積極的に活かしてもらいたい。

注

- 1) 曾我部敦介・近藤益代 (2017) 「愛顔(えがお)つなぐえひめ大会における学生ボランティア養成：希望郷いわて大会の視察から考える」『聖カタリナ大学人間文化研究所』22, 113-122.
- 2) 近藤益代・曾我部敦介・西本浩章 (2018) 「全国障害者スポーツ大会における選手団サポートボランティア活動について」『Leisure&Recreation (自由時間研究)』43, 88-93.
- 3) 曾我部敦介・近藤益代・中村年男・森実紀・西本浩章 「大学生におけるボランティア養成に関する研究」『Leisure&Recreation (自由時間研究)』43, 94-98.

引用文献

愛顔つなぐえひめ国体・えひめ大会実行委員会 (2016) 『選手団サポートボランティア養成講座テキスト』